
真・恋姫無双～男の様な女の様な白いヤツ～

みんとす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜男の様な女の様な白いヤツ〜

【Nコード】

N7898Y

【作者名】

みんとす

【あらすじ】

自分のストーカーを庇って死んでしまいました。突然ですよね、でも始まりはいつも突然みたいです。目の前のマツチヨで水着？な気持ち悪い人（でも良い人みたいです）によるとどうやら真・恋姫無双の世界に転生させてくれるみたいです。もしか自分が主人公と思っていると主人公さんはきちんといるみたいです。そんな事よりなんだか身の危険を感じてきたのでさくつと行ってしまいましたよ
う！！

しあいにしと説明書きかな？（前書き）

とりあえず試しにうpしてみます。ミスってないといいな…。

「あいつと説明書きかな？」

どうも初めまして、今回真・恋姫無双の二次創作ものを書いてみようと思っております。今回真・恋姫無双の二次創作ものを書いてみようと思っております。

三国志の知識などゼロではありませんが全然詳しくありません。そして、この手のものなど全く書いたことも無かったんですがやってみようと思えます。ですので突っ込み所満載なかんじになってしまおうと思えますのでその辺はスルーしていただけたら幸いです。

予定では原作の流れをかなり参考にしていこうつもりです。あと、ハールムはあんまり無い方向でそちらは一刀さんに任せようと思えますが誰かとは仲良くしたいと画策中です。

今の時点で一応のエンディングまでの道筋は考えていますがあくまで暫定的なものです。最後の戦いに相応しい攻防にしたいのですがなかなか…。ほんの前までは読む専だったので他の同系列の作者様のすげえを感じている今日この頃です。

前書きはこのくらいでどうか寛大な心で私の妄想にお付き合いください。

しあいにしつと説明書きかな？（後書き）

後書きにはなるべくアニメのＣパート？みたいなのを考えて書いて
いきたいと思います。ではっ！！

これが僕の前世です（前書き）

祝1話うpと言うことでまずは1話目です。こんな感じでいいのかな？短いのかな？誤字とかはないよな？そもそも文法的におかしい事がありそうだし、なんてビクビクしている心境でございます。

これが僕の前世です

目の前にトラックが迫ってきているのが見える結構なスピードだ、そして少し離れた所には最近知り合いになった女の子が驚いた顔をしていた。

「（これは死亡確定だろうな…。まあ、いいかな死んでも…。いいのかな。）」

なんて少しさめた考えをしてたら天地がひっくり返るような衝撃と激痛が襲ってきた。自分がまさかテレビか何かみたい人に人を庇ってトラックにひかれてしまうなんて思ってもいなかった。

それでも一人の女の子を助けて死ぬことができ良かったのかな、なんて考えることもできなくなり始めていた。

「（痛い……。い……。いた……。くない……。あれ、ああそろそろ……。ダメなんだなあ……。死んだら、や、っぱ……。り、考えること……。と、も……。でき……。なく、か……。な。）」

ぼやけた視界であの女の子が何か言いながら涙を流しているのを見ながらその少年の命は終わりを迎えていった。はずだったのだが…。

とりあえずは死んでしまった前に戻る。

見た目はいたって普通の少年。両親はいるはずだが会ったことはない、人にはいろいろあるものでわざわざ聞くようなものでもないだろう。そんな彼は学校の大勢は口数の少ない地味な感じ、友達からは無口ではないが冷めたヤツだと冗談半分に言われていた。

その評価は間違っではないが大方の原因はその少年は頭で考えていても実際に口にだすことが少ないせいでもあった。あと、若干の妄想癖があったりなかったりといった感じである。

そんな少年に遂に彼女が…と思いきりやストーリーカーができました。それがまあなんといいですか最初はちよつと怖かったけどなんら実害がないので放置していたんですが、なんというかお知り合いになったのだった。

「（今日はいないんだな）ってなにを考えてるんだよ。」

なんて考えながらいつもの様に学校から帰っていると後ろからドサツと音がした。どうしようかきつとでもろくなことにならないだろうなと思いつつ見に行ってみると…。

「……………」

「……………やっぱり。」

あのストーリーカー少女が倒れていた。予想どつりの展開でこのまま放置することもできたのだが流石に相手は女の子なので

「（ほつとく訳にもいかないよね。）えっと、だいじょうぶ？」

「う……………うん……………」

「……………」

目と目が合うその瞬間……………沈黙、そしてだんだん少女の顔が赤くなつていった。ストーリーカーをするような人がどんな人かは知らないけ

どなんか普通にかわいい女の子だった。とりあえずずっとこのままでいいわけがないので

「どっか公園とかで休む？」

「……コクッ。」

そして、割と近くに公園があつてベンチに座つて休むことができたのだがまたの沈黙であつた。少年はしゃべるのが得意ではないのだがなんとかコミュニケーションを取ることに成功してみたところによると、理由は簡単な事でどうやら風邪をひいていたそうだ。

そんな状況でストーキングするなんて意外と根性があるのかな、なんてずれた感想を思い浮かべていたのだが

「（あんまり変な事を聞いてややこしいことになる前に）それじゃあもう行くから、あんまり無理はしないようにね？」

「え……はい。」

とりあえずはそう言いながら帰つたら何しようかなんてもう既に他の事に気をとられながら座っていたベンチから立ち上がり、帰ろうと踏み出そうとした所で

「……………あのっ、気持ち悪い、とか…思わないんですか？」

「えっ？、うーん。……まだ人を好きになつたりした事がないからなんとも言えないかな？それに夜中に電話がかかってきたり、物がなくなつたりそうゆうのはないからね。」

彼女には彼女のストーリーカーの教示でもあるのかな？いや彼女の根がきつと良いんだろう、って何でそんな事考えてるんだか変なこと考えるのはよそうと考えると

「そう……ですか。あの……よかつたら、でいいのでまたお話……してもらってもいいですか？」

と俯き恥ずかしそうにしながら言ってきた。なんと言うか、普通に萌えてしまった自分がいました。ストーリーカーじゃなくて普通にこうして付き合いたすことのできる人なんじゃないのかなんて勝手に思い、気が付いたらまた話そうということになってしまった。

そんなこんなで彼女と知り合いになったのだが……簡単に申しますとストーリーキングとお話が9：1ですかね。そんな感じの付き合いになってしまいました。そんなことになってから少しの時が経ち、やっとお話が2になってきた時に起こったのが先の事故だった。

初めて一緒に帰り道を並んで歩いて帰って、ここで別れると言いなから信号の前で彼女が恥ずかしさを隠すように走って渡ろうとした所に例のトラックだった。

危ないと思った瞬間に体が自然に動き彼女の体を突き飛ばした。いきなりの事に驚いていたがトラックが来ていたのに気が付いたのかさっきとは違う感じで驚いていた。

そして冒頭に戻るのであった。

「（そっかあの子の事好きになってたのかな？それなら死んだのは

ちよつと惜しいかな。」と言つかなんかアレ以外はほとんど変わつた事がないような人生だったな、次はもう少しいろいろ頑張ってみようかな……。」

「それならもう一度やり直してみる？その、い・い・お・と・こつて言うかカワイイ坊やかしらん？」

……その声のがする方を見るとそこに変態がいた。

これが僕の前世です（後書き）

ある所に自分の部屋のベッドの上で泣いてる一人の少女がいたでした。

「うっ…そんな…こんなのもって、やっとお話できてたのに…私の、私があの人に…本当に…ごめんなさい…」

それから少女は疲れて寝てしまっても寝言で謝っていた。そんな少女の夢の中で……。

この人には人類の進化の謎が詰まっていそうです（前書き）

少し暴走してしまっただかもしれないです。おかしいなちゃんとした話だったはずなんですが、前半が少なく後半が膨張してしまいました。タイトルが前半の内容しか指していないのが何よりの証拠ですよね。

この人には人類の進化の謎が詰まっていそうです

そこには筋肉でおっさんでピンクの紐パンでひげでもみ上げが三つ編みの変態さんがいらっしやいました。居たんだよ、居たんだからしょうがないじゃんよ。

落ち着こうとりあえず落ち着け自分、あれは……どんな生活をしていればあんな人間になるんだろうかそもそも人間なんだろうか？なんかDNAからしておかしい気がするんだけど、とりあえず何か言っただろがいいだろう。

「（よしっ、何か……）へ、へんた」

「私は都に返り咲く可憐な踊り子、貂蝉よん。」

「……はい。」

動揺して思わず本音を口走りそうになった所で貂蝉さんとやらから物を言わせぬ気というか圧力が発せられたのは思い違いだろう、きつとそうに違いない。

「（それよりも今更なんだけど）あれ？なんでだろう、トラックにひかれて死んだんじゃないか？」

そう思って自分の体を見ても怪我をしている所は全く無いし痛い所なんかもなかった。実際に触ってみても実体はきちんとあるみたいだし、それに周りを見てみるとなんにもない本当に真っ白の世界だった。

「そうよ、あなたは死んでしまったのよ。今のあなたはね言うならば魂だけの状態かしら？」

「そうですか。（理解はできるが信じることができないしここはそういう事だと思ったほうがいいのかな？）」

「今はちょっと時間がないからすぐに本題に入って悪いけど、あなた転生してみない？」

「転生つてあの転生ですか？」

「そうね、あなたが今考えているのとほとんど同じだと思うわ。」

貂蝉さんが説明したのを要約すると今の記憶と意識を持っていける容姿や身体能力などの注文もあるていどは聞いてくれるらしい、そして転生後は好きに生きていけばいいらしい。

どうやらその世界は主人公がいるからとか？外史の補正值が足りないから僕を送るらしい？だそうです。

そしてその世界とやらは真・恋姫十無双の世界らしいです。なにやら三国志みたいな世界で男ではなく女が活躍しているみたいでした。言うのが貂蝉さんが何かしたら頭の中に高速でその知識が流れ込んできて理解できた。なんか頭が痛いです貂蝉さん。

「まあ、詳しいことはあなたは気にしないでいいわ。それでどうするの？」

「転生はします。身体能力は高めにしたいんですけど後はお任

せします。」

「あら、ずいぶんと謙虚ね。(うふふ、すぐに返事なんて意外と度胸があるのね気に入ったわ。)」

「はい、身体能力が高いとそう死ぬような事もないと思いますし。あと病気なんかの免疫も高くしてもらえませんか？」

それに欲張るといい事がないだろうし、貂蝉さんが言うにあんまりこのままの状態にいるのは良くないらしい。それと何かいやな予感がしたので早く行きたくなった。

「了解よん。そんな所かしら何かあったらこっちで融通するから細かい事は心配しないでいいわよ。それじゃあ行ってらっしゃい。」

そうして少年は光の中へと消えて行ったのであった。そうここまで良かったのだが……。

side：天界とかそれ系の所

「さあこれで私の書く項目は終わりかしら、それじゃあ後の設定はよろしくね。」

「はい、後は転生課の方ですのでお任せください。(これなら新人にまかせてもいいな)ネリーこの書類のやってみる」

「課長!!!遂に初仕事デスか?精一杯やらせていただくデス。」

遂に私にも仕事が来ましたヨ。あのやたら偉そうな禿げたオヤジもたまには良い事をするデス。しかもお任せ欄が結構ありますネこれは期待に答えるしかないデス。待っていてください名前も顔も知りませんが泣いて喜ぶようなデキにして見ますヨ転生者さん。

「ほう、あの外史ですとそうデスネ。（ココはこうしてーこんな感じでーフッフ、この能力はーこんなのも面白いデスネーこの際見た目なんかもーいや、伝説のアレなんかもいいデスネ）」

翌朝

「ふう、何とか徹夜してできましたデス。アレ？この警告はなんでしようか…アレ？…ヤリ過ぎましたデス。これでもギリギリのところで抑えたつもりなのデスが…と、おやこれは…なるほどこの機能で抑えればいいのデスか？」

フッフ、遂にできたのデスこれであの禿げオヤジもワタシの才能と仕事ぶりに感動する事間違えなしデス。それでは提出用の印刷をして提出でしたヨネ。

「できましたデスはg…いえ課長（コレでワタシもどんどん仕事を任せられるようになるはずデス）」

「そうかよくやったな。ふむ…（アレ？なんだか課長の表情がおかしいデス）…お、お、お前！なにやってんだよ！！普通に考えてこのステータスはおかしいだろう！！それにこのく対チート抑制機能はな調子に乗って無茶な事要求してきたヤツへの罰のため

にあるんだぞー!」

「……………。(ヤバイデスどうしましょう)」

「どうした。…………まさか確認する前に確定送信したんじゃないよな、そうだよな?」

「…………いやそれがデスネあ」

「送信したんだな」

「確定送信したデス…………。」

その後、彼女の姿を見た人はだれもいなかったそうです。そして、課長さんがどうにか転生確定する前に緊急措置をしたのでそこまでの大事には一応はならなかったそうです。ですが既に確定送信したデータは改変することが難しく能力と少しの見た目を抑えるにしか至りませんでした。

ついでに言っけてしましますと、もし改変ができなかったら…………天使みたいな何かがある世界に誕生していたそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7898y/>

真・恋姫無双～男の様な女の様な白いヤツ～

2011年11月24日00時46分発行